
ICT を利用した大学での英語授業：
CALL ラボ教室での実践

柳 善和

名古屋学院大学総合研究所



University Research Institute

Nagoya Gakuin University

Nagoya, Japan

目 次

ICT を利用した大学での英語授業：CALL ラボ教室での実践 柳 善和（名古屋学院大学）	1
2012 年度研究会報告	28
2012 年度研究会資料	
(1)新課程を見据えた授業実践報告：英語が使える生徒の育成を目指して ～新課程の中の文法指導について～ 塚本裕之（静岡県立富士高等学校）	32
(2)いよいよデジタルが高校にもやって来た！学校の中における ICT の活用を考える ～電子黒板からデジタル教科書まで～ 米田謙三（大阪羽衣学園高等学校）	44

ICT を利用した大学での英語授業：

CALL ラボ教室での実践

名古屋学院大学

柳 善和

1. はじめに

本論文では大学の英語授業において ICT を利用してどのような授業が可能であるかについて、事例研究 (Case Study) (Duff 2008) として筆者の実践をもとにして検討する。対象にするのは外国語学部英米語学科で開講されている「英語演習 107」である。この授業では名古屋学院大学名古屋キャンパス日比野学舎に設置されている CALL ラボが利用されており、ICT の特徴を十分に活用した授業が展開されていることになる。また授業はシラバスの中に組み込まれており、学期及び年度を通して ICT が継続的に使用されている。その授業の方法、教材、学生の反応などについて紹介し、その詳細及び将来の方向性などについて論じることとする。

ここで取り上げる「英語演習 107」は、1 年生が大学生活のスタートを切る春学期 (4 月～8 月初め) の科目であり、大学での英語学習の方向を決める可能性もあるという意味で重要な科目であり、その内容、授業の進め方などを検討することは意義があると考えている。また ICT を利用することで、学生のその後の英語学習にどのような影響をもたらすかも合わせて考察したい。

2. 対象としている授業及びそのシラバス上での位置づけ

(1) 外国語学部英米語学科のシラバスの中の「英語演習」の位置づけ

この論文で対象にしているのは前述のように外国語学部英米語学科で開講されている「英語演習 107」である (註 1)。英米語学科では 1 年生のために「英語演習」と名称がついている科目を春学期と秋学期にそれぞれ 5 コマずつ合計 10 コマ開講しており、これらはすべて必修である。各学期ごとに見ると開講されている 5 コマのうち 2 コマを英語母語話者の教員が担当し、残りの 3 コマを日本人教員が担当している。107 は日本人が担当する 3 コマのうちの 1 つである。1 クラスの学生数はおおよそ 25 名から 30 名で各年度の入学者数によって異なる。また英語母語話者が担当する 2 コマのうちの 1 コマは 1 クラス当たりの学生数が他のクラスの半分になる。

英米語学科では、特に 1 年生については、英語能力を確実に身につけてその後の学習に活かしてほしいという考えがある。第 1 に、高校から大学に進学する機会に、これまでの英語学習の方法を振り返り、英語能力を確実に身につける学習方法に気づかせることが期待されている。第 2 に、2 年生以降では専門科目の履修が本格的になり、そのための英語能力の養成に 1 年生で目途を立てておきたいという考え方がある。また、特に 2 年生以降に留学の機会を得て海外に行く学生も多いことがあり、そのための十分な英語能力の基礎を養成するという必要もある。第 3 に、就職活動の早期化によって 3 年生以降では基礎学

力の養成にじっくり取り組む時間が取りにくいことがある(註2)。

それぞれの授業の内容は各科目ごとの共通シラバスによって決められており、「英語演習 107」は主に英語のリスニングを扱うことになっている。しかし、2012 年度までについてはそれほど強い縛りとはなっていない(註3)。本論文が対象とする授業の内容の詳細は後述する。

(2) クラス編成の方法

「英語演習」のクラス編成は、入学の際のオリエンテーションで実施する TOEIC の得点によって行っている。この点については従来から議論があったが、現実的な問題として入学してくる学生の英語能力にかなりの差が存在する以上はやむを得ないという暫定的な結論を得ている(註4)。クラス分けの方法としては以前は成績順に5クラスに振り分けていたが、現在は成績最上位の1クラス、次の成績の学生で1クラス、そしてその他の学生を3クラスに無作為に振り分けている。これは経験上、5クラスすべてを成績順にクラス分けすると、下位のクラスで授業が難しくなるからである。英語能力や学習習慣の問題、さらには欠席が多くなりがちになるなどの問題があるが、もっとも大きな問題はクラスの中に英語学習のモデルとなる学生がいなくなるということであろう。

クラス分けについては今後入学者の英語能力の分布が変化した際には再度考慮する必要があるだろうが、現在のところこの方法が最善解であろうというのが教員の判断である。

3. 学生の特徴

「英語演習」を受講している外国語学部英米語学科の学生について、一般的には素直な学生が多く、授業中は指示に従ってきちんと学習し、与えられた課題には熱心に取り組む。英語学習に対しては意欲的な学生が多く、また授業以外でも積極的に英語学習に取り組んでいることが多い。しかし一方で、英語能力については不十分なままで入学している学生が一定の割合で在籍していることが問題点として挙げられる。入学時に実施している TOEIC の得点を見ると大多数は200点から400点程度で推移しており、その中に600点を超える学生がいるというのが現状である。またいわゆる入学のプロセスにおいて、学力試験を経ずにAO入試や推薦入試で合格して入学する在籍しており、その中には一般的な学習の習慣が身につけていない学生も散見される。

総じて言えば、学生の英語能力及び英語学習に対する取り組みについて幅広く分布している状態であり、個々の学生に応じた取り組みが必要とされている。ICTを活用した英語教育の実践が必要とされる所以であると言えるかもしれない。

4. CALL 教室

(1) 教室の構造

名古屋学院大学には外国語学習用のCALL教室として日比野学舎に3教室が設置されている。そのうちの2教室は共通の仕様であり、筆者の授業もこの教室で行われている。

この教室は2007年4月に大学が名古屋キャンパスを開設した際に新たに設置したもので、筆者も加わって他大学のCALL教室の構造などを企画・設計の際に参考にしている。各教室は36のブースを備え、それらのブースを4つずつに9つのグループにして教室に配

置している(註 5)。学生は教室の前後に対して横向きに着席することになるが、それによって、教室の前方の壁も後方の壁も同様に见ることが出来、また学生同士がグループごとに向かい合うことになる。つまり学生が前方と後方を両方とも见ることが出来る位置にあることを活かして、前方は教員のブースやホワイトボードを配置し、後方の壁にはスクリーンを配置してプロジェクターからの映像を映している。これによって一部の教室で見られるように、ホワイトボードとスクリーンがかぶさってどちらか(多くの場合ホワイトボードや黒板)が見えなくなるという事態が防げる。また、教師卓が教室前方に設置してあることから、教員もスクリーンに映しているものが、確実に写っているかどうかの確認も含めて、学生と同じものを見ることが出来る。またスクリーンを見るのと同じ方向で学生の反応なども確認することが出来る(註 6)(註 7)。教員卓には教室の機器の操作盤を設置し、すべての操作が教師卓で行うことが出来るようにしている。



写真 1 :

前方教師卓から教室後方のスクリーンを撮った写真。学生が前方と後方の両方を見ることが出来ることが分かる。

(2) 学生席の設備

各学生ブースには机の上にパソコンのモニター、キーボードが置かれている。パソコン本体は足元に置き、そこにキーボードとヘッドセットの端子が接続されている。ヘッドセットは使わない時は机の下にあるフックにかけておく。さらに並んで座っている2名の学生のパソコンモニターの間に中間モニターを設置している。中間モニターでは学生用のパソコンモニターと同様に教師側からいろいろなデータを送ることが出来るが、例えば学生が自分のパソコンで課題に取り組んでいる時に、中間モニターに参考になる資料や教材な

どを送ることが可能になる。この中間モニターがないと学生のパソコンにそれらの資料を送ることになり、役に立つのではあるが、その資料を送って説明などをしている間は学生は自分のパソコン画面を見ることは出来ず、学生の作業は中断されてしまう。中間モニターがあると、その資料が必要な学生は中間モニターを見ながら作業をしたり、教員の説明を聞いたり出来る。一方自分で課題が進められる学生は、それを見ずに教員の説明を聞き流しながら自分の作業に集中できる。

学生ブースのパソコンには Microsoft の Office、Internet Explorer、他に CALL ラボ教室で使う教材（後述）がインストールされている。学生ブースのパソコンは自分で電源を入れて独立して使用することも可能である（註 8）。また、教師卓から一斉に電源を入れて起動することも可能であり、その際は学生席のパソコンは ID とパスワードの入力を求めるところから操作を始めることになる。学生ブースからもインターネットのアクセスは可能で、後述のように授業中の個別学習の際には、例えばネット上の辞書サイトを利用したり、参考資料を検索したりするなどかなり頻繁に利用している。

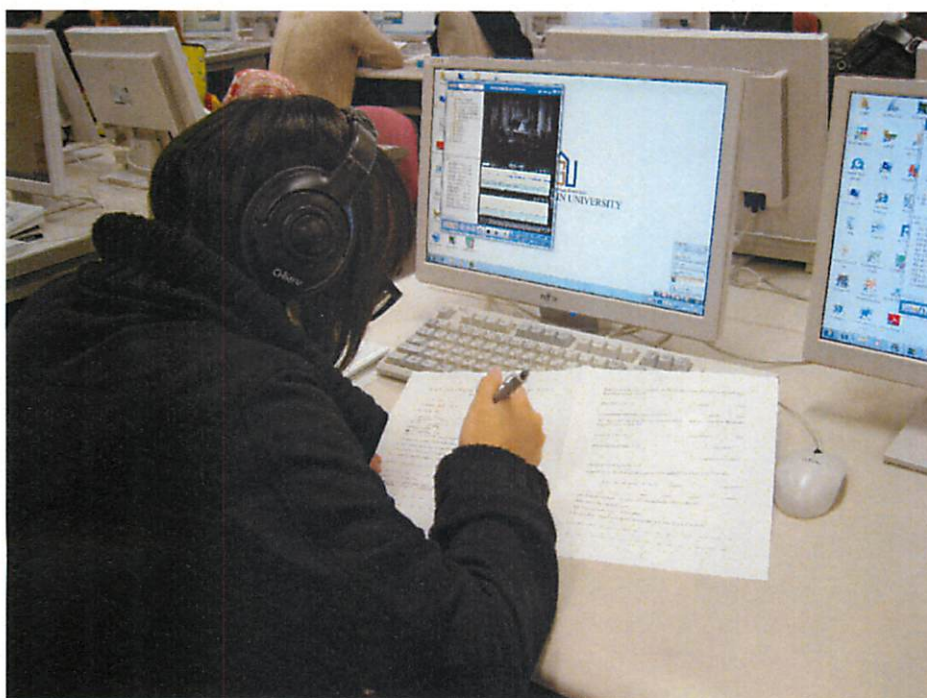


写真 2：

学生ブースの様子。学生が dictation の課題（後述）に取り組んでいるところ。学生のパソコン画面の右側に中間モニター（一部）が写っている。

(3) 教師卓の設備

教師卓は前述のように教室前方、学生に向かって右側（入り口から入って教室の奥）に設置してある。過去の LL 教室では、学生の部屋の後方に教師用の操作卓を設置した別室を設けることもあったが現在はあまり見かけない（註 9）。LL 教室が普及するにつれて、普通の授業の感覚で LL 教室を使うことが一般化し、現在のような教室が設置されてきた。

授業をする側からも授業を受ける側からも、普通の教室のように教員と学生が常にやり取りが出来るようにしておくことで授業がスムーズに進められる(註 10)。

教師卓側の機器としては、パソコン、モニター2 台、AV 機器の送り出し機器、OHC、プリンターが並んでいる。

モニターのうち1 台はパソコンの画面を映すものである。もう一台は学生ブースのパソコンの様子を見るもので、学生側のパソコンの電源、学生がモニターで映しているものなどがわかるようになっている。またこれらの学生の席のアイコンをクリックするとさらに詳細に学生が見たり聴いたりしているものを教師側でも見たり聴いたり出来る。学習の進捗状況などを確認する場合に役に立つ(註 11)。AV 教材の送り出し機器は、後述するように教師の右側足元のラックに収納されている視聴覚機器と OHC を切り替えて学生のパソコンモニター、あるいは中間モニターに送り出すためのものである。この機能に加えて、教室後方のスクリーンの取り出し及び収納のスイッチもある。

視聴覚機器として収納されているのは、VHS/DVD プレーヤー、Blue-Ray プレーヤー、CD/MD プレーヤーである。このうち Blue-Ray プレーヤーはあとから追加されている(註 12)。さらに教員が持ち込んだパソコンやビデオ機器を接続できる端子も備えている。普及している視聴覚機器はほぼ網羅していると思われるが、今後新たな機器が開発され一般的になった時には視聴覚機器の入れ替えや追加も考慮されることになる。プリンターは教師卓のパソコン専用である。

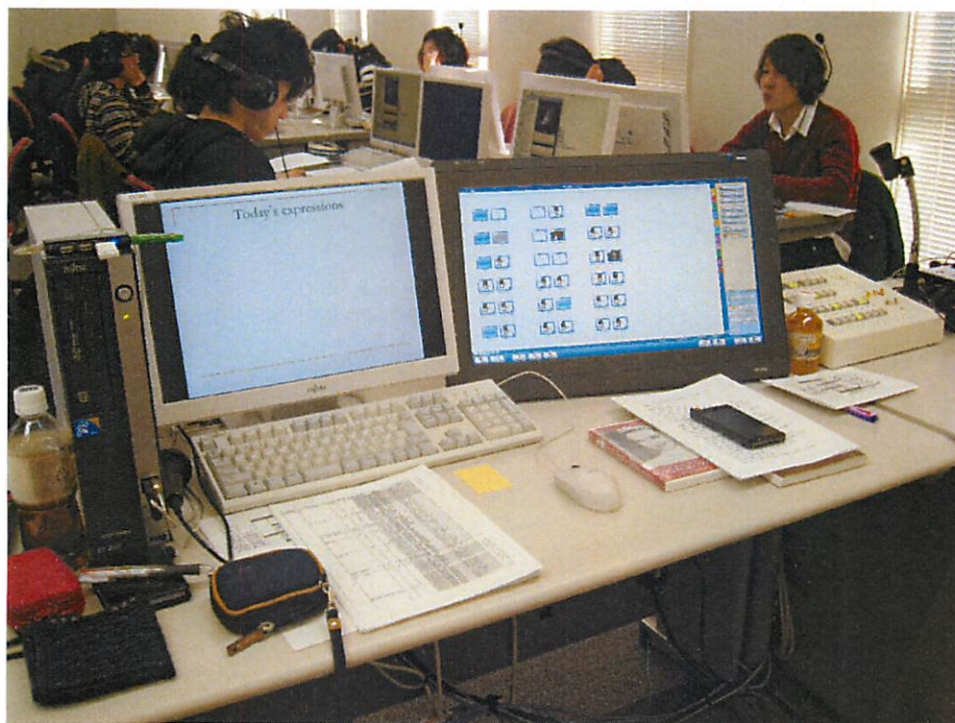


写真 3 :

教師卓の様子。左からパソコン本体、パソコンモニター、学生ブースの様子を映すモニター、視聴覚教材の送り出し装置と並んでいる。この右側に OHC、プリンターと続く。

5. 授業の内容

(1) 授業の目標

前述のようにこの授業は英米語学科1年生の必修科目であり、シラバスは共通化されている。しかしながら実際には個別の授業でそれぞれの教員が授業の目標を設定して授業を行っている。筆者としてはこの授業の目標を次のように考えている。

- ①英米語学科の学生として、将来自分の英語学習(他の外国語も含めて)を企画・立案していく能力を身につける。
- ②英語(外国語)学習の方法は多様であることを理解し、できるだけいろいろな学習方法を体験する。
- ③身の回りにあるものを教材として利用する方法を身につける。

これらの目標では、いずれも人から与えられる学習ではなく、最終的には自分で自分の学習を企画・立案できることを目指している。学生たちは大学に入学するまでに、中学校や高等学校でどちらかと言えば教師側が主導して学習を進めることに慣れており、さらに大学受験という枠組みの中で英語を学習してきた。そのような学習習慣から自分で自分の学習について考える、いわばメタ認知能力を養うことが大学での英語学習の目標であると考えている。すべての学生が卒業後に英語の専門職に就くわけではないが、英米語学科の学生として英語を専門として学ぶことになるので、ぜひ自律的な学習者になってほしいと考えている。その点で①は全体的な目標ということになる。②は①の目標を達成するために、まず、いろいろな学習法を体験するということを目指している。また③では身の回りにあるものをどのようにすれば自分にとって最適な教材とすることが出来るかを考える機会を与えたいということである。「最適な教材」と言うと、「学習者の特徴を分析してその結果から特定の教材を編集してその学習者に与えるもの」という印象を持つことがあるが、実際には最適な教材というのは、身の回りにある教材を自分の英語能力をはじめ、自分の性格、学習の方法の好みを考えて、自分に適した方法で使うことである。現在は英語学習のための教材はどこにでも存在している。辞書、教科書、参考書などは様々な種類が豊富にそろっている。さらに、実際に英語が使われている文書、ビデオ、音声も身の回りにいくらでもある。このような状況を活用することが自分の英語学習を企画・立案することになり、その能力を学生に身につけてほしいのである。

(2) 授業の進め方

ここでは授業の進め方を説明する。授業は毎回次に示すように①から⑦のユニットから構成されている。

- ①Review Test
- ②語彙チェック
- ③Dictation
- ④スクリプトの配布(答え合わせ)
- ⑤解説

⑥その日のタスク (暗唱)

⑦「振り返りシート」の記入・提出

このように毎回同じ授業構成を取るのには、学生が安心して授業に臨むことが出来るようにするためである。授業ごとに構成を変えることは「驚き」とか「意外性」などの要素が授業に含まれることになり、学生が「楽しみ」を感じることもあるかもしれない。しかし一方で授業中の次の場面で何が起こるか分からないということは学生に不安を与える可能性もある。次の授業でどのような手順を取るのかが学生に予想できる方がそのための準備（感情的な部分も含めて）をするという意味で必要である。

以下に①から⑦の授業の構成要素ごとにその内容を述べる。

①Review Test

授業は前回の Review Test（復習テスト）から始まる。これは授業の最初に前回の授業内容について行われ、前回の教材から4つの選択肢で10題出題する (Appendix 1)。

授業の最初に Review Test をすることについては、第1に、後述するように、授業全体の枠組みとして復習重視という姿勢がある。前の授業で学習したことを次の週まで維持することがその最も重要な目的である。人間はいったん見たり聴いたりしたことをその瞬間は把握できるが、その後は忘れていく。大学の授業は1週間に1回であるので、次週までその内容を何らかの機会で見直すことができれば、それをいくらかでも長期記憶に残しやすい。第2に、学生に授業の準備をする機会を提供することが出来る。授業前に教室に着いて他の学生と遊んでいるのではなくて、何からの形で学習することができればと考えている。実際にほとんどの学生は教室に到着すると前の週の教材を取り出し、他の学生たちと出題の予想なども含めてテストの準備に取り組んでおり、その意味では効果があると言える。

テストは5分程度で終了し、その後すぐに回収して、学生が個別学習に取り組んでいる時間（②語彙チェックや③Dictation の時間など）を使って採点し、結果を表計算ソフトに入力し集計してグラフ化して学生に見せている（図1）。平均点、標準偏差、さらに得点順に並べたグラフを見せると、学生は自分の成績についてクラス全体の結果を参照しながら把握できるので次回の励みになる。テストはその授業中に学生に返却している。1クラスの学生数が25人から30人程度であることと、テスト形式が選択式で問題数が10題ということで採点や集計はそれほどの手間ではない。また、Review Test をその時間中に採点して返却できるということは迅速なフィードバックという観点からも重要である。

②語彙チェック

復習テストの回収と同時にその日の教材（ワークシート）を配布する、この教材にはその日の授業で使用する主な語彙と dictation 用の教材（スクリプトの一部を空所にしたもの）が載せられている (Appendix 2)。まず学生はその日の語彙の意味を自分で調べて記入する。基本的に教材は授業当日に配布し、学生に授業内容の予習を求めることはない。この理由は、①Review Test の項目で言及したように、英語学習においては復習の方が重要であると考えているからであるが、現実的な問題として予習を課したとしても全員の学生がきちん

と予習してくるとは限らず、また単に他の学生のを写すだけということになりかねないからである。その点では全員の学生を授業中に確実に学習に取り組ませた方が効果が上がると考えている。

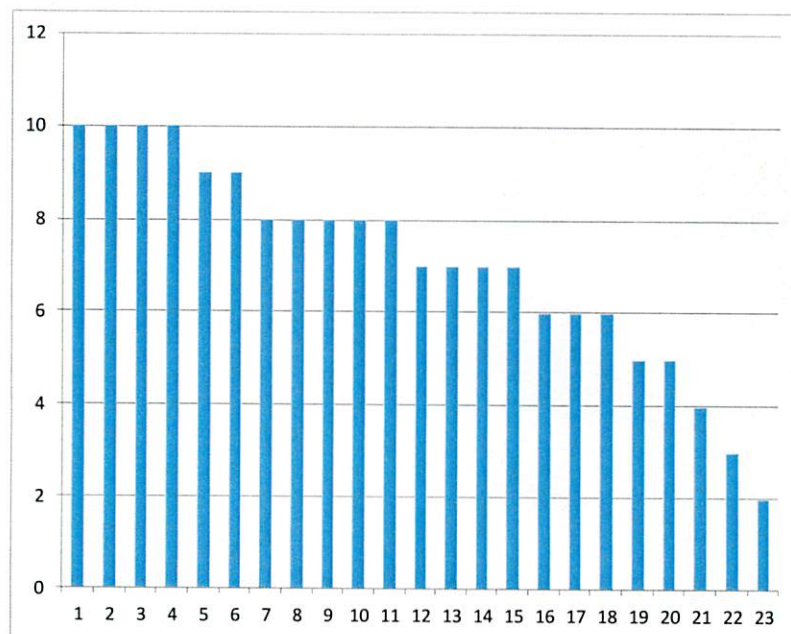


図 1 :

Review Test の成績。10 点満点で得点の高い順に右側に並べたグラフ。学生は自分の得点を当てはめてクラスでどの程度の位置にいるかが一目で分かる。なお、平均点と標準偏差は別途示している。

学生たちは自分の辞書で語彙の意味を調べて記入する。辞書については特に指定していない。電子辞書を持参する学生が多数であるが、印刷辞書を持ってくる学生もクラスに数名いる。またネット辞書を大学入学時からすでに利用している学生や携帯電話のアプリとして辞書がある場合にはそれを使う学生も数名ずついる。印刷辞書や電子辞書によって作業するが、場合によってはインターネット上の辞書を参照しながら作業する学生もいる。インターネットにある辞書は学期の最初に紹介しているが（註 12）、学生自身で使いやすいサイトにアクセスして作業させている。学生の作業の進行状況を見ながら、全体で語彙の意味を確認する。ここでは一人ずつあてて調べた意味を言わせ、プレゼンテーションソフトで語彙とその意味を順番に中間モニターで示している。口で言っただけでははっきりわからないこともあるからであるが、語彙の中で用法なども含めて提示した方がいいものは、その情報も示しながら確認していく。また意味を示すだけではどういうものか分からない時などは、検索ソフトの画像表示を利用して写真などの一覧を示すこともある（註 13）。

③Dictation

語彙チェックが終わるとその日の教材を扱う。作業としては dictation（書き取り）を行うが、まず最初にその日の教材をクラス全員で視聴する(映像教材の場合には映像を見る)。これはまず教材全体の話の概略を把握して、dictation をする際に文脈をわかりやすくするためである。指導の内容としては、話の内容で分かった部分（聞こえた語彙なども含めて）を自由に発言させることが多い。教員側から説明するよりも、学生に自由に発言させた方が、発言できた学生には達成感が生まれ、また聞いてもよく分からなかった学生にもクラス全体で出された意見を聞くことで、自分でも参加感が得られる。このようにクラス全体から出された意見に教員が若干の補足をして個別学習に移る。

Dictation に使用する音声ファイルは数分程度で、その日の教材によって長さが異なる。これを CALL ラボ教室のパソコンにインストールされている「ムービーテレコ」といわれるソフトで取り出して使用する。この音声ファイルはあらかじめ教員がサーバーにアップロードしておく。音声ファイルを作成するには「ムービーテレコ」に音源(CD や DVD など) から教材にする部分を流し込み、それにファイル名をつけてサーバーの指定の場所にアップロードする。手順としては簡単で、慣れればスムーズに作業が出来る。ただし、機器の操作が手作業になるため、ファイルの最初と最後をうまく取り込むことができないこともあり、1、2 回作業をやり直すこともある。

授業中の作業として dictation を課すことにはいくつか理由がある。そのひとつは dictation が従来から外国語習得に効果的な学習方法だと言われてきたことがある。表面的にはまず音声を聞き取って、それを書き取るという作業であるが、「聴き取り」から「書き取り」の間には単に話し言葉を書き言葉に転記するという以上の過程が含まれている。まず、最初に聞き取る音声はひと繋がりのもので認識される。それを単語ごとに分けて認識しなければならない。この過程では、聞こえてくる音声は必ずしもそれぞれの単語が鮮明に発音されているわけではなく、また単語と単語の間の音声が実際につながっていたり、強く発音される単語、弱くしか発音されない単語など様々な要素が混合している。それを分析し書き言葉にするには、その発話の文脈を考え、文法的に整合性のある文を作り、それをさらに文脈に戻して正解を作るという作業が必要になる。また dictation は、実際の作業の手順としては単純で音声とそのスクリプトさえあればどこでも学習方法として取り入れることが出来る。ただし、分からない箇所を何度も聞き返す必要があり、その点この CALL ラボで使用している「ムービーテレコ」のような音声のデジタルファイルを簡単に操作できる装置があればなおいっそう効果的であろう。

「ムービーテレコ」による学習の特徴は、まず第 1 に個別学習が基本になり、学生が聞きたいだけ、聞きたい方法で聞くことが出来ることである。クラス全体で聞く場合には、学生が個別に分からない部分があっても、その部分だけを繰り返し聞くことは期待できないが個別学習として作業をするとそれが可能になる。第 2 に、デジタルファイルであることから、音声ファイルのどこから再生するのかを秒単位で指定でき、その部分だけを繰り返し聞くことができる。なお音声ファイルの場所の設定は画面上に音声の波形が表示されるので、それを見ながらでもある程度は可能である。さらに音声のスピードを調整することが出来るので、分かりにくいところの音声をスピードを遅くして聞くことが出来る。これは便利な機能で、もとの音声に対して、例えば 0.8 倍など倍数によって指定する。

④スクリプトの配布(答え合わせ)

学生の作業の進行状況を見ながら7割から8割程度の学生が作業を終えたところで、スクリプト（空所がなくすべて英文が書かれている教材）を配布する。学生はそれを見ながら自分の解答を確認し、間違っている箇所や聞きとれなかった箇所を埋めていく。この時は学生に自分が間違った箇所や聞きとれなかった箇所があとから見てわかるように黒以外の筆記具を使うように指導している。間違いの修正が終わった学生は、自分のワークシートを見ながらもう一度音声ファイルを聞くように指導する。これは自分が聞きとれなかった箇所を意識化することで、自分が苦手な英文のパターンを気づかせることを目指しているものである。

⑤解説

スクリプト配布による作業の終了後に、教員の方から今日の教材の中の重要表現や文法項目について簡単に説明する。これについては網羅的に説明するのではなくてあくまでも簡潔に項目を絞って説明する。基本的にこの授業では教員が説明するよりも、学生が自分で作業することに重点を置いている。したがって説明する内容は学生が興味を持つ内容を考えて選んでいる。

例としては次のような表現があった。取り上げるポイントとしては、学生がこれまでの英語学習のどこかで習った表現で、改めて文脈の中で確認すると今後定着するだろうと期待できる表現、という基準を念頭に置いている。例1、例2はいずれも中学校、高等学校のいずれかの学年で学習していると思われるが、改めて文脈の中で現れて、さらに自分で dictation を試みた後であれば定着の可能性も高いと考えられる。

(例1)

Thank you for coming all the way to our office.

弊社までわざわざお越しいただきましてありがとうございます。

(例2)

A: Would you like a seat in the front or the back of the plane?

機体前方の席と後方の席、どちらがよろしいですか？

B: It doesn't matter.

どちらでもいいです。

例1と例2で、例えば下線の部分は、「coming all the way to (わざわざ(場所に)やってくる)」ということを暗記しているだけでは、例1のようにビジネスの場面で使われるということは気づかないだろう。また例2でも「Would you like~?(~はいかがですか?)」の表現も空港のカウンターで飛行機の座席の決める時に使われることや、「It doesn't matter. (どちらでもいいです)」をこの場面を使うことが出来るなど、学生にとっては、改めてこれらの表現を確認する機会となる。また例2で使われている「前方の座席」「後方の座席」ということを「the front seats」「the back seats」という語彙で表現できることも、これらの語彙そのものは当然学生たちも知っているはずであるが、このような言い方にも

使えるということを学習することで、よりいっそう英語の運用能力が向上することになる。

⑥その日のタスク(暗唱)

①か⑤までの内容が終了すると、今度はその日の教材の中から範囲を指定して暗唱のタスクを行う。範囲はその日の教材の難易度を考慮してあらかじめいちは決めているが、さらに授業の進行状況などによる残り時間も考慮してその都度決めている。

暗唱のタスクを与えている理由はいくつかあり、第1にその日に dictation で取り組んだ教材を一部でも何らかの形で production の技能に結びつけておきたいからである。dictation も production の要素を含んでいるのは前述の通りであるが、人の前で(この授業の場合には教員) production をすることを授業のまともとしておくことは将来の production 能力につながる。言語習得の中でも output の重要性が言われているが(Swain 1985, 1995, 2000)、授業でもそれをどこかで取り入れることが必要である。第2に、授業の最後に達成感を持ってもらいたいということがある。これは後述のように、特にペアやグループで暗唱のタスクに取り組むので、うまく出来た時の喜びはひとしおのようである。

学生たちからは、この暗唱について、負荷が大きい(しんどい)タスクだという認識が聞こえてきたり、また一部の学生たちからは、「どうせ忘れるのだからやっても無駄ではないか」という声も聞こえてくる。学生に対する説明としては、「たとえ忘れるにしても、いったん覚えてそれを先生の前でちゃんと暗唱してみる、というのは将来英語能力を伸ばす上でとても役に立つのだ」と話している。

実際にペアやグループで暗唱の課題に取り組む前に、全員で練習する。これは課題の英文(対話文)の中で新出語彙の発音、文のイントネーションなどを確認するためである。その日のここまでの授業の中である程度は慣れてきているはずであるが、それまでに取り上げなかった語彙の発音が曖昧であったり、文の音の流れが不自然だったりするので一斉に指導しておく。具体的には教員の後について音読することから始まり、次に音声ファイルの音声を使ってスクリプトを見ながらシャドーイングをする。シャドーイングは、モデルの音声を聞きながら、その後を追いながら音声を発話していく練習である。本来は同時通訳の訓練用に使われている。何も見ずに音声だけを追いかけていくことが本来の練習形態であるが、実際にはなかなか難しく、そのための練習として、テキストを見ながらやったりすることもある。授業でシャドーイングを取り入れる際には、それぞれの学生の到達度に合わせて、スクリプトを見ずに言えそうな場合には見ずに、自信がなければ時々見ながらなど学生自身に選択させている。また、ムービーテレコで音声の速さを調整できるので、最初は 0.7 倍でシャドーイングさせたり、慣れてきたら 1.0 倍の本来の速さでやってみたりとその日の教材の難易度なども考慮しながら調整している。

一方、暗唱のタスクの与え方についてはいくつか工夫している点がある。

第1に必ず複数で行うことである。学生の組み合わせはペアによることが多いが、3人や4人などのグループで実施することもある。基本的に1人で暗唱の課題を行うことはない(註14)。これは暗唱の課題を行う際に協働学習の考え方を取り入れたいからである。ペアやグループで課題に取り組む場合には学生は必ず相手のことを考えながら行動する。暗唱が出来たグループから「振り返りシート」(後述)を提出して退室していいことにしているので、自分が出来ないと相手も教室に残らなくてはならない。そのために集中して暗

唱に取り組むという構図になっている。第2に、ペアワークやグループワークのメンバーの指定は基本的に学生たちに決めさせている。4月の最初は隣同士の学生でペアを組ませるが、慣れてくると自分たちでペアを組ませる。さらに時々、「男女でペアになって下さい」「これまで一度もやったことのない人とペアになって下さい」などの条件をつけることもある(註15)。第3に、グループで暗唱の課題に取り組む際には、対話文では登場人物ごとに役割を振るよう指示するが(註16)、それ以上の分担は学生たちに決めさせている。暗唱の課題は、常に登場人物の発話量が同じとは限らない。その際にはじゃんけんで決めるグループが多いが、暗記の苦手な学生に少ない方を割り振ったりといった配慮も学生間で自発的に行っている。第4に、暗唱のやり方を示している。やや漠然としているところもあるが、次のようなものである。

- (i)相手のせりふも頭に入れる
- (ii)後ろのせりふから覚える
- (iii)身振りと一緒に覚える
- (iv)相手の目(顔)を見て話しましょう!
- (v)みんなで覚えよう!

(i)については相手のセリフも把握しておかないとペアやグループでの暗唱はできない。自分のセリフだけしか暗記していないと自分の出だしが分からなくなる(註17)。(ii)は筆者が経験的に身につけたことであり、すべての学習者に適用できるのかはわからないが、学生にはいちおう試してみるように指導している。(iii)(iv)は、ともすると暗唱したことを単に言うだけになってしまうので、出来るだけ自然な会話になるように誘導するためのものである。(v)については、協働学習の主旨を言い換えたものである。

暗唱の評価については、覚えたペアあるいはグループから前に来て教員の前で暗唱できれば合格としている。途中でつかえても自分たちですぐに言い直したり、やり直しが出来たりするようならそれで合格にしている。なかなかうまく覚えられないペアにはヒントを出したり、単語を教えたりしながら最後まで言えるように助ける。暗唱が上手に出来るかどうかは学生によって差があるが、まず1つは一般的な暗記能力と、暗記する際の集中力などによっていると考えられる。また、どうしても覚えることが苦手な学生も含まれているので、あまり過度にプレッシャーを与えないように注意する必要がある。もう1つは英語能力によるもので、やはり暗唱の課題そのものが学生にとって難しければ負荷が大きくなり覚えにくくなる。ただ、英語を含めて外国語学習はどうしても暗記学習が必要であり、その意味ではこの暗唱課題を機会にして暗記する能力も合わせて伸ばしてほしいと考えている。学生たちは年齢的にもまだ暗記能力を鍛えることが出来る年齢であり訓練する価値は十分にあるはずである。

⑦「振り返りシート」の記入・提出

授業の最後に学生は「振り返りシート」を提出する。この「振り返りシート」の内容はその日の授業の教材について問うもので次の通りである(図2)。

①自分にとっての難易度：		
1 2 3 4 5 6 7		
ものすごく易しい	ちょうどいい	ものすごく難しい
<理由とかコメント>		
②自分にとってのおもしろさ		
1 2 3 4 5 6 7		
ものすごく つまらない	どっちでもない	ものすごく おもしろい
<理由とかコメント>		
③自分だったらこの教材をどんなふうを使う？		

図 2：

「振り返りシート」の内容。実際には A5 用紙に印刷して配布しており、学生番号、氏名を記入して提出する。

①と②については 7 件法で数字に○をつけ、その理由やコメントを書くようにしている。③については自由記述のみである。いずれも自由記述の部分も何か記入するように指導している。この結果については A3 用紙 1 枚にまとめて次の週に学生に配布している。その際には①と②の数値データの平均と標準偏差、さらに自由記述部分のコメントすべてを公開する (Appendix 3)。また配布する際に特徴的なコメントなどを紹介し、どういう観点から授業の振り返りをするかについて示唆している (註 18)。他の学生のコメントを見ることで自分とは違う観点で授業を受けたり、教材に取り組んだりしていることがわかり、学習方法のメタ認知能力が向上することを期待している。

自由記述欄の手書きのコメントをすべて入力し直すのは時間がかかるが (註 19)、学生のコメントを毎回きちんと把握することができるいい機会だと考えている。

学生のコメントの一部を以下に示す (註 20)。まず①「難易度」についてのコメントである。学生は教材全体についてのコメントをすることが多い。例えば次のようなものである。

「長い文が難しかった。」

「聞きとりやすかった。簡単な単語が多かった。」

具体的な項目を示しながらコメントをする学生も多い。

「どうしても前置詞が聞きとれないから。」

「will や have などの助動詞が聞きとりにくかった。」

「高校で習ったはずの let と allow の文法を忘れていて、語順が難しかった。」

「前回よりも語と語がつながっていて難しかった。」

これらのように具体的な項目が指摘されると、次の学習ではどのようなことに焦点を当てて取り組めばいいかについて気づきが見られ、次の学習に活かされると考えられる。さらに自分の学習についての感想もコメントされている。

「1回目に聞いたときは難しそうだったけれど、答えあわせしてみたらいままで一番間違いが少なかった。成長を実感した。」

「難しいけどできるとすごく嬉しいと達成感がある。」

次に②「おもしろさ」についてのコメントである。学生たちはまず全般的な学習の楽しさに言及している。

「わかりやすかったからたのしかった」

「内容が分かりやすかった」

「難しいが覚えたら楽しい」

「スラスラと言えるとうれしい」

本来この「振り返りシート」は毎回の教材について尋ねているのであるが、学生たちはしばしばこのようなコメントを書いている。次に教材が「役に立つ」という観点からのコメントである。

「実際に空港で会話するときとかに役立つと思った」

「海外に行くときとか使いそうだし、タメになった」

「海外でホームステイに行ったときに使えると思った。実用性がある」

「丁寧な表現が学べるので役に立つ」

これらについては教材のどのような観点が役に立つのかまで書いてあることが多い。例えば、これらのコメントでも、「実際に空港で会話するとき」「海外に行くとき」「海外でホームステイに行ったとき」といった場面に言及している。英米語学科に入学してくる学生たちは、入学までに海外に行った経験がある者も一定の割合で含まれ、その時の経験をもとにして英語教材を評価していることもしばしば見られる。また教材の内容（ジャンル）に言及していることもある。例えば、日本文化を扱った教材を扱った際には次のようなコメントが見られた。

「異文化の事を知れました。」

「文化の違いがあつておもしろかった！」

またビジネス英語の教材を用いると次のようなコメントがあった。

「ビジネスで使えるものだったのでよかった。」

「ビジネス英語ははじめてで面白い。」

③については、まず具体的な方法とかに言及するのではなく、「とにかく頑張って勉強したい」というコメントが多い。例えば、次のようなものである。

「よみまくる。」

「毎日聴くように心がける。」

「ひたすら覚える。」

「くり返し聞く。」

「毎日シャドーイングしたいです。」

「ディクテーション。」

これらは「とにかく一生懸命やる（あるいはやりたい）」という意思表示であるが、具体的な方法を示していない点では、実際に実行しているのかは疑わしい。ただしこれは学生側のいちおうの意欲の表れとも考えることも出来る。

具体的な学習法を示しているコメントもある。例えば次のようなコメントがある。

「日常会話で使ってみる。」

「文は難しいが、少しずつでも聴き取れるようにする。」

「iPod にいれて毎日きく。」

「たくさんきいて口に出す。」

「プリントを見て目で追いながらきく！！」

「何回も聴いてすらすら言えるようにしたいです。」

「日常会話で使ってみる」というのは学生によっては留学生と普段から交流している学生もあり、英語を実際に使っている学生もいるので具体性は高い。「iPod にいれて毎日きく」というのも学生たちは携帯プレーヤーを常に持ち歩いており英語学習に役立てている者も多い。「たくさんきいて口に出す」というのは、単に聞くだけでなく実際に口に出してみるだけでも効果が期待できる。ただし、相手がある実際の場面で使ってみることがより重要だろう。

他に「いつか将来使いたい」というコメントもある。これは②「おもしろさ」の項目でも見られるコメントと一部重なっている。

「実際に外国の人に日本の伝統を伝えるときに活用する。」

「Is that a popular name?は留学生の会話に使いそう。」

「留学したときに使いたい。」

「旅行の前とか旅行にもっていききたい！」

「いつか外国行ったり、外国人に出会ったりした時に対応できるようにするため毎日聞く。」

これらのコメントについては全体としては学生の考え方がよく反映されており興味深いものも多く見られる。しかし、この授業実践の本来の目的としている「自分の英語学習を企画・立案できる能力を養成する」という点から見ると、学生たちは学習方法についてこれまでに多くを経験しているわけではなく、大学における英語学習を通じて自発的な気づきは多くを期待できないように思われる。「意欲」はあるのだがそれを実現する手段に乏しいというのが現状である。この点については、これまでの「振り返りシート」に書かれた学生の言説を別途詳細に分析しておきたいと考えている。

(3) 授業の教材

「英語演習 107」では教材として、NHK ラジオ第2放送、NHK E テレの英語教育番組を毎週、週替わりで使用している。英語学習用の番組が毎年多く放送されているが、それらを活用して教材としている。

ねらいとしては、まず第1に番組ごとにレベルや目標が様々で、学生にいろいろな教材を利用する方法を習得させやすいということがある。この点はこの授業の目標と合致している。第2に、授業で取り上げてもしそれが気に入ったら、自分で継続して視聴することが出来る。自発的にすべての番組を試してみることはなかなかできることではないし、自分のレベルや関心に合致する番組を選んで視聴することになるだろう。また中学校や高等学校の先生から薦められた番組を視聴し続けているという例もしばしば学生から聞く。授業で取り上げると、それまで全く考えていなかった教材に出会える可能性もあり、教材選択の幅が広がることが期待できる。

6. テスト・評価

(1) 評価の方法

学生に対する評価の方法としては、学期末試験の得点、平常点、出席点の3つを合計して評価の基礎にしている。割合は学期末試験 70%、平常点 20%、出席点 10%である。このうち「学期末試験」は次の項目で説明する。

平常点は毎回の授業の最初に行っている Review Test の平均点を2倍にしたものである。欠席あるいは遅刻してこの Review Test を受けることが出来ないと、そのテストは0点として換算される。この措置は遅刻に一定の歯止めをかけることになっている(註21)。出席点は出席点を出席1点、遅刻0.5点として、学期中の出席率を計算し10点満点に換算したものである。さらに学期末の得点も70%で換算するが、いずれにしても表計算ソフトで集計するので計算が煩雑になってもかまわない。また真面目に出席して授業に取り組んだ学生が有利になるように配点を工夫し、なおかつテストのための準備に一生懸命に取り組む価値があると思わせるようにバランスを取るように努めている。

以上の結果を大学の成績の基準に当てはめて成績としている。実際にはテストの難易度によって平均点に変化するので、点数の分布などを見ながら全員の学生がほぼ妥当な成績が得られるように点数を調整している。

(2) テスト（学期末試験）の内容

学期末試験では、①Dictation (50点)、②空所補充 (30点)、③日本語訳 (20点)の構成

で出題している。

①Dictation では、授業中にムービーテレコで練習したものからすべて出題している。なお、授業で練習したものは難易度を意図的に多様にしているが、テストの際にはできるだけ学生の英語能力のレベルに合わせて調整している。例えば、書き取る文の長さが長すぎるものや、極端に聞き取りにくい部分が含まれている場合には出題しない。この部分は実際のテストでは、教師側のパソコンのムービーテレコを使って音声だけを教室のスピーカーで流している。基本的には学生の状況に合わせて時間を空けて3～4回流す。学生の状況に合わせてというのは、学生が書き取る様子を見て見当をつけている。採点の都合上、2つの対話文で5個ずつ、合計10個の空白を作っているが、それぞれ最初の1回ずつは出題している対話文全体を聞いてもらうためにそのまま流し、2回目からは空所の直前で前述のように音声を止めて書き取らせる。

②空所補充は、Review Test で出題した問題から15題出題する。具体的には2つの文章から選び、それぞれ7個と8個の空所を作って、Review Test の時と同じ選択肢を使って出題する。毎回の Review Test をきちんと受験しておくこと、また返された答案用紙をきちんと点検しておくことで、この問題は高得点が期待できることを学生に説明しておく。

③授業の中では教材の和訳はほとんど扱っていない。ただしスクリプトを渡す時に、そこに日本語訳もついているので、分からない英文などがあったらその資料を参考にするように指示している。おおよその意味が分かれば一定の得点は取ることが出来る。ただし、授業で重視していないことを学期末試験で出題するのは、テストの妥当性の点からも問題であるので、今後の検討課題としたい。

7. まとめと今後の展望

(1) まとめ

今回取り上げた英語演習107の授業実践について、その意義として次のようなことが挙げられる。

①CALLによる授業実践の蓄積

まず第1に、CALL 教室における英語授業の方法を固定して、教室の機器を使いやすくしたことがある。コンピュータやネットワークを利用した教育は、開発されてからこれまで様々な学習手法が取り入れられ試されてきた。これはそれ以前に使われていたLL 教室でも同様である。このことは新しく開発された機器の可能性を試すという意味で成果も多く上げてきたが、一方では授業をどのように進めればいいのかについて担当教員の迷いが生じたり、逆に使い勝手が悪くなったりしたことも事実である。最近のCALL 教室では、逆に使用する機器や機能を単純化して、教員が授業をしやすくする工夫も見られる。また現行のCALL 教室では、Windows 機やMac 機が使用され汎用性にすぐれているので、必要なソフトウェアをインストールして使うことになる。従って教員によって必要なソフトウェアや授業の進め方について異なっても機器の運用には影響を与えない。

ここで報告した授業では、授業の進め方を固定し、使用する機器をスムーズに使えるようにしている。授業を行う場合に機器の不調で授業が中断する事態は避けなくてはな

らず、そのためにも授業の流れを作る（固定する）ことは重要である。

これは学生にとっても機器操作で戸惑うことを防ぐことが出来るので、授業をスムーズに進める要因としては欠かすことが出来ない。

②自律した学習者の養成

この授業の実践の目標は5(1)で示したように「自律した学習者の養成」であった。以下に授業の目標を再掲する。

- ①英米語学科の学生として、将来自分の英語学習(他の外国語も含めて)を企画・立案していく能力を身につける。
- ②英語(外国語)学習の方法は多様であることを理解し、できるだけいろいろな学習方法を体験する。
- ③身の回りにあるものを教材として利用する方法を身につける。

5(2)⑦で説明したように毎回の授業の最後には「振り返りシート」の提出を求めている。この「振り返りシート」は、その日に学習したことを学習者の視点からまとめるという効果も期待されるが、この内容を検討する必要がある。実際にこの記録を見ると5(7)にも示したように、学生たちが自分の学習方法についていろいろな考えをその時に持っていることが分かる。また、目標の③で示したように様々な教材に対して学生たちがどのように利用するかを考えさせることもこの授業の目標であった。これに対してはまだ十分な結果が出ているとは言えないだろう。これについては次の「今後の課題」で取り上げる。

③協働学習の導入

「授業の進め方」で触れたように、ここで取り上げた授業実践では必ず授業の最後に暗唱の課題を出し、複数のグループ(2名の場合にはペア)で課題に取り組ませている。これによって1人の力だけではなく複数の学習が協働して学習することを学んでいることになる。「あるいは、こういった「協働学習」という方法があることを少なくとも知ることができる」外国語学習はしばしば「独学で習得した」というような紹介がされたりすることもあるが、基本的に外国語学習では interaction(やり取り)による学習が重要であるとされている。実際に言語を声に出して、相手がいる状況で使ってみるということが必要であり、さらに自分が発話したことに対して相手がそれに応えてくれるというのが次の発話につながっていく。

今回の実践では暗唱に取り組ませており、ここに示した interaction の実践は行われていない。これは授業の目標の設定や、授業の進め方からくる制限などもあるからであるが、何らかの形で自分の言葉で目標言語を発話するということも検討されていいだろう。しかし、ここで経験した協働学習が、学生たちの外国語学習以外でも適用されてより広い視点から学習ということを考えるきっかけになってくれればいいと考えている

(2) 今後の展望

① 自律した学習者養成の継続

前述の(1)②でも述べたように、この授業の目標は自律的な学習者の養成であった。その1つの手段として1学期を通して学生に「振り返りシート」を書かせて、さらにそれを次の授業でフィードバックした。フィードバックについては Appendix 3 に示すように、学生が記入した「①教材の難しさ（難易度）」「②教材の有用性（役に立つか）」の2項目のポイント（7件法）と①②及び「③これからの学習に活かせる点」についてのコメントである。

このデータを見る限り一定の割合の学生は自分の英語学習を客観的に考える視点を持っていると考えられるが、それらがあまり見られない学生もまた存在している。今回蓄積したデータをどのようにこれから活かすかを考える必要がある。この点については2つの方法が考えられる。第1に、データの詳細を更に分析しその実態を把握することである。現在までには出来ていないが、例えば学生のコメントについて同じ学生が学期中に書いたものを並べてどのような多様性が見られるか（同じコメント、同じ言いまわしをくり返しているのか、あるいは教材によって多様な表現が使われているのか、など）を調査し、さらにそれを学生間で比較するといったことが考えられる。第2に、授業の中で実施しているフィードバックについて、現在は前回のデータを配布して簡単な紹介（「こんなコメントあった」など）を行っているが、この点でさらに学生に対して、「このような視点で考えるといい」「難しい」「役に立つ」の具体的なポイントを考えることでもっと自分に適した学習法が見つかるかもしれないなどの考え方の方向性を示すことも考えられる。これは一方では学生の考え方に一定の型を与えることになり、学生の多様な考え方を制限してしまう可能性もあるが、あくまでも学生がさらに考え方を深める方策として実行することを考える。第3に、5(2)⑥で触れた「協働学習」の考え方を取り入れて、授業の中で学生がその授業の教材についてどのような学習方法が考えられるかをペアやグループで意見を出し合いそれをまとめて発表させることも、学生に意識的に学習方法を考えさせる機会になるだろう。これは授業の進め方の中でどこに導入するか、あるいは毎回導入するか、何回に1度とするかなど実際的なやり方を検討する必要があるが、実行する価値はあると考えられる。

② 教室外学習との連携（モバイル学習の確立）

この授業では Review Test に対する準備が事実上の教室外学習（あるいは授業外学習）と位置づけられる。一方で学生は「振り返りシート」の「③自分だったらどんなこの教材でどんな学習をするか」の部分で積極的なコメントを書いていることが多い。このことを活かして学生が授業外で学習する機会を提供することが考えられる。

この点について、学生が持っているパソコンの利用がまず考えられる。名古屋学院大学では入学する学生全員にパソコンを配布し、授業でそれを活用するようにシラバスが作られている。学生が授業外で自分のパソコンを使って大学のポータルサイトにログインし教材を取り出すことも可能である。

また、現在では学生が持っているモバイル機器を利用した外国語学習について研究が進められており、多くの実践例も報告されている。教室外学習の機器としては今後の展

開が期待されている。

教室外学習としてパソコンやモバイル機器を使用することは、実践として興味を持たれるが、教室外学習のための教材、あるいは授業に準拠した課題を常に用意しておくことになり、その開発も考慮する必要がある。

③Case study としてのデータの蓄積

この論文は筆者の CALL ラボ教室における実践を case study (事例研究) として紹介したものである。case study については、その方法論やデータの一般化の可否が議論されることもあるが、例えば Van Lier (2005) では case study のこれまでの研究例を概観し、将来扱うべきテーマを論じており、その中の 1 つとして ICT を利用した外国語教育を挙げている。CALL ラボ教室をはじめとする ICT を利用した外国語教育については、特に新しい機器の紹介や、それを使った報告などが多く、実際に長期間にわたる実践報告などはこれまでに数が少ない。最初に登場した時の目新しさが過ぎて、実際の授業で無理なく使えることが分かった後に、いろいろな校種、教材、授業の目標を持った実践報告が蓄積され多様な議論が展開されることが期待される。

註

(1) 外国語学部国際文化協力学科でも CALL ラボ教室においてほぼ同じ内容の授業が開講しているが、シラバス上の位置づけなどが必ずしも同一ではないのでこの論文では考察の対象とはしない。

(2) 第 3 の点については、大学教育全般の枠組みからも好ましいことではなく、抜本的な改善が必要であろうが、ここではそれには触れない。

(3) 今後どのように「英語演習」の各科目にどのような内容を振り分けるか、またそれをどの程度拘束力を持つものにするかについては議論がある。特に完全な共通シラバスにして、教材なども統一する方向に向かうのか、あるいは授業の一部について共通教材を使用してあとは各担当教員に任すのかなどは難しい問題であろう。

(4) 「暫定的な」と断ったのは、しかしそれでも英語能力の高い学生と低い学生を一緒にして、例えば協働学習の考え方に基づいて学習させる方法もあるのではないかという意見もあったからである。また、学生にとって能力別編成が英語学習への動機づけにどのような影響を与えるのか、また英語学習を超えて例えば自尊心に影響を与えるのではないかなどの疑念も少なからず考えられる。しかし一方で学生が英語学習を進める上で、一定のレベルに焦点を合わせて授業をしなければ、学生の英語能力と大きく乖離した授業になる可能性もありその場合にも動機づけを弱める結果となる。そのような意見を踏まえて現在の方法が採られている。

(5) 実際の学生数は 25～30 名を想定しているが、ブース数が 36 と多めに設計しているのは、パソコンやネットが機械によって不調になった場合の予備席として考えている。これは CALL 教室を設計する際、あるいは教室の学生・生徒数を見積もる際に考慮に入れておくべき事柄である。

(6) 教室の前方にスクリーンがある場合には、教員はいったん教室の横側に移動してスクリーンを見るか、機器の操作盤がある席に座っている場合には後ろを振り返りながら見るこ

とになる。この場合には学生の様子を見ることは出来なくなる。

(7) 学生席を横向きに設置していることによるもう一つの利点は、学生のパソコンや中間モニターに何が映っているかを常に確認できることである。教師側から教材などを中間モニターに送ったり、あるいは学生のパソコンを一斉に操作したりする場合に、一部のパソコンだけでも目に入ると自分の操作がきちんと実行されているかがわかる。一方で、学生席を前向きに作ると（つまり教師と向かい合う一般的な教室の座席配置）にすると、教師側からは学生のパソコンに何が映っているか確認するのにいちいち教師卓から離れて学生のパソコンを確認に行くなど手間がかかる。

(8) そのために、教室の空き時間に教室に入り込んで課題などの提出物を作成する学生も散見される。

(9) 初期の LL 教室はブースが壁で仕切られていた。これはもともと LL 教室が Audio-Lingual Method を念頭に置いて開発されたからであり、ドリル学習などを個別学習で行うことが目指されていたからである。その後は、様々な学習者に対して柔軟に授業を組み立てることが出来るように徐々に教室の形態が変化してきた。また、同時に技術の進歩によって比較的小型の機器で教室全体を制御することが出来るようになってきたことも現在のような形態の教室が普及することを後押しした。

(10) 初期の LL 教室で教員卓（操作機器）が教室後方の別の部屋にありガラスで仕切られている場合には、学習者はヘッドセットのマイクを使って教員とやり取りをしていた。このような方法だと、その学生と教員の間での個別学習としての質疑応答には都合がいいが、例えばその学生の質問が他の学生とも共有したい場合などには、教員がもう一度それを学習者全員にくり返すなどしなくてはならない。

(11) ただ、36 ブースの教室であるので、このようなモニター装置を使ってももちろんいいが、実際に机間巡視をして学生の様子を見ることの方が教育上は有効であろう。実際には学生がインターネットで授業と関係のないものを見ていたりする時に、教室卓からインターネットの接続を一時的に切断したりする際に使用している。

(12) DVD と Blue-Ray disk については一体型のプレーヤーが一般的であり、ここで示した機器も実際には両方が使用できる。ただし、VHS と一体になったものが販売されておらず、また VHS 単独のプレーヤーが販売中止になっていることからこのような組み合わせになっている。

(13) 代表的なものとして Weblio (<http://ejje.webl.io.jp/>) などがある。

(14) 例えば、教材の中に open terrace cafe が出てきた時に、辞書で調べてもなかなか見出し語として見つからなかったり、説明があってもそれだけではどんなものか想像できにくかったりするので、Google で検索をかけて画像ファイルで表示させると簡単にどういうものを理解させることが出来た。

(15) 実際には、過去に 1 人ずつに課題を課したこともあったが、1 人ずつ暗唱をチェックすることに時間がかかるという問題と、1 人でやらせると学生の集中力が上がらないということに気づいて以降は必ず複数で取り組ませている。

(16) これは受講しているのが 1 年生であり、出来るだけ多くの学生と知り合う機会を与えたいと考えているからである。

(16) 時々対話文を前半と後半に分けて分担している学生がいた。それでは対話文を教材と

して扱っている意味がないので、このような指示をしている。

(17) 学生はどうしても必要最小限で課題を切り抜けようとするので、実際にペアで暗唱してみても自分の出だしが分からなくて途中で暗唱が止まってしまうという経験をしないと、なかなかこのことは理解できないようである。そこで1、2回授業を終えたところで、改めて授業で取り上げて指導することになっている。

(18) あくまで「示唆」としているのは、学生自身の気づきを重視しているからである。

(19) 筆者の場合には1クラス分でおおよそ30～40分程度である。

(20) ここで引用している学生のコメントはすべて2012年度春学期の振り返りシートから引用したものである。学生のコメントについてはそのまま掲載しており、いっさい変更は加えていない。

(21) 英米語学科の時間割では、「英語演習107」の授業は「英語演習109」の授業と続いていて、いずれも日比野学舎で開講している。従って、学生が2時間目に「英語演習107」がある場合には1時間目に「英語演習109」を同じ校舎で受講しているので遅刻する学生はいない。1時間目の授業で遅刻してくる学生がいることになる。

参考文献

- Brown, H. D. (2002). *Strategies for Success: A Practical Guide to Learning English*. New York: Addison Wesley Longman, Inc..
- Dudeney, G. & N.Hockly (2007). *How to teach English with technology*. Essex: Pearson Education Limited.
- Duff, P.A. (2008). *Case Study Research in Applied Linguistics*. New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: some roles of comprehensive input and comprehensive output in its development. In Gass, S., and Madden, C. (eds.) *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In Cook, G., and Seidlhofer, B. (eds.) *Principle and Practice in Applied Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Swain, M. (2000). The output hypothesis and beyond: mediating acquisition through collaborative dialogue. In Lantolf, J.P. (ed.) *Sociocultural Theory and Second Language Learning*. Oxford: Oxford University Press. pp.97-114.
- van Lier, L. (2005). Case Study. In Hinkel, E. *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. pp.195-208.
- 柳 善和(2008)「自律的な学習者養成に向けたシラバスの構築について」『中部地区英語教育学会紀要』38, 363-370.

Appendix (1) Review Test

English107(Wed. 1st period) Review Test May 9, 2012

Chinatsu: Sakura, look at this. These are the (1) horoscopes (2) May.

Sakura: Hmm. You know, Chinatsu, I'm not really interested in Horoscopes.

Chinatsu: Aren't you a little (3)?

Sakura: I want to become a scientist (4). I don't believe (5) horoscopes.

Chinatsu: Let me see. Here is (6). "Aries: You will get a good score on your first test in your (7) subject. Study hard!

Sakura: It's too (8). I already finished my first science test.

Chinatsu: (9) did you do?

Sakura: I got a (10) score.

Chinatsu: Then your horoscope is right!

* Fill in the blanks (1) - (10).

(1) ①daily ②weekly ③monthly ④annually (答)

(2) ①at ②with ③on ④for (答)

(3) ①cure ②curious ③curiosity ④curiously (答)

(4) ①everyday ②anytime ③some days ④someday (答)

(5) ①at ②of ③on ④in (答)

(6) ①you ②your ③yours ④it (答)

(7) ①favor ②favorable ③favorite ④favoring (答)

(8) ①slow ②late ③soon ④early (答)

(9) ①How ②Who ③What ④Where (答)

(10) ①preferable ②complete ③complex ④perfect (答)

Student ID _____ Name _____

Appendix (2) : Worksheet

2012 年 5 月 23 日水) 英語演習 107 **Words and phrases:**

regional	variety
cuisine	season (verb)
fellet	sprinkle
vinegar	stall
haute	ingredient
besides	superb
customers	ready-made
prawn	

Dictation

Eguchi: Stuart, tempura has many regional varieties, like most other types of Japanese cuisine.
Any particular favorites?

Atkin: Well, in Okinawa, I tried shima rakkyo tempura and that was really good.

Eguchi: Well, in Okinawa's tempura is unique.

(1) _____

Talking about deep-fried foods in Britain, I know fish 'n' chips have long been popular.

(2) _____

Atkin: Well, (3) _____

We don't have delicate little pieces like tempura, and of course there's never any tail left on the fish! The secret is to sprinkle on lots of salt, just like tempura, but also malt vinegar. Never eat fish 'n' chips without malt vinegar!)

Eguchi: OK, I'll remember that.

Atkin: Hiro, (4) _____,

so how did it come to be served at specialized restaurants as an haute cuisine?

Eguchi: Well, (5) _____

Besides, they prepare the dish with superb skills in front of their customers, so that the customers can enjoy piping-hot freshly cooked tempura.

Atkin: Which means it's a superior type of fast food!

Eguchi: Exactly! (6) _____,

although, of course, it's difficult to cook it as well as the professionals do.

Atkin: That's interesting, (7) _____

_____, partly because of the danger! So, we usually buy fried food

cooked at a shop or have it at a restaurant. These days, many people will buy ready-made frozen chips, for example, and battered fish pieces, fish nuggets, etc., to just heat up or grill.

Eguchi: Hmm, (8) _____

Atkin: Well, in Scotland they serve fried chocolate bar.

(9) _____

Eguchi: Oh, no thanks! I'll stick with prawns!

Atkin: well, as we say ...

Both: Chacun à son goût!

Student ID _____ Name _____

Appendix(3)：振り返りシートまとめ（スペースの関係で一部省略してある）

①自分にとっての難易度：→平均 3.92

1 2 3 4 5 6 7

ものすごく易しい

ちょうどい

ものすごく難しい

<理由とかコメント>

- ・文が長かったです。
- ・B が比較的やさしかった。
- ・聞き取りやすかった。
- ・聞きとりやすかったが覚えにくかった。
- ・今日の会話は意味を考えながら言って覚えたので、これからも思い出しやすいと思った。
- ・内容もやさしいし、ゆっくりだからかんたんだった。
- ・どうしても前置詞が聞きとれないから。
- ・今回は1回目でほとんど聞き取れた。
- ・聞きやすい。
- ・ネイティブの発音が難しい。
- ・喋るのが遅いので良い練習になった。
- ・聴き取るのはそれほど難しくないが、細かいところを間違えたので。
- ・内容は簡単だけど文が長い。
- ・単語も難しくなく簡単だった。
- ・今回は今までの中でも簡単だった。
- ・今日の単語は聞きとりやすかった。
- ・自分でもできそうな難易度でした。
- ・長い。
- ・先週よりはやさしかった。
- ・イメージできる内容だったのでやりやすかった。

②自分にとってのおもしろさ→平均 4.96

1 2 3 4 5 6 7

ものすごく

どっちでもない

ものすごく

つまらない

おもしろい

<理由とかコメント>

- ・使えそうでよかったです。
- ・使えそうだから。
- ・将来役に立ちそう。
- ・外国に旅行に行ったときに使える表現もあったので、覚えておきたいと思った。
- ・音声をきく回数もまちがえる箇所もへってきてたのしい！
- ・聞きとりやすいから。

- ・ 1回目でほとんど聞き取れたので楽しかった。
- ・ 覚えやすい。
- ・ ちょうどいい。
- ・ 場面をイメージして喋りやすかった。
- ・ 会話を長くつづけるのは大変だが、おもしろいと思ったから。
- ・ わかりやすく身近な内容で良かった。
- ・ 旅行している気分を味わえた。
- ・ 長い会話は楽しい。
- ・ 実際に使えておもしろそう。
- ・ 実際に空港で使うことができるだろうと思った。
- ・ 分かると楽しい。
- ・ ノリが良すぎる。
- ・ 良く使いそうな表現もでてきてよかった。
- ・ 英語で会話しているみたいで良かった。

③自分だったらこの教材をどんなふうを使う？

- ・ 何回も言いまくる。
- ・ 毎日聴く。
- ・ 何度もきいてすらすら言えるようにする。
- ・ 興味がある場面なので積極的に聴きたい。
- ・ ひまなときにききたい！
- ・ 日常会話での受け答えの練習をする。
- ・ 留学前とかに
- ・ 何回も聞く。
- ・ 会話の練習。
- ・ 簡単な表現で会話をつづけられるように注意して聴く。
- ・ インターネットで再放送あるのでひまなときに聞きたい。
- ・ 時間のあるときに聴く。
- ・ 覚えて読む。
- ・ 何度も聞いて何度も声に出して覚える。
- ・ リピートする。
- ・ 何回も聞く。
- ・ 実際に国際線を利用するときに活用する。
- ・ 何度も聞いて完璧に言えるようにする。
- ・ 搭乗券買うときに使えるし、他のパターンのセリフもあって便利。
- ・ 自宅で聴きます。
- ・ 繰り返し使う。
- ・ 空港などでつかえるように、頭に入れておく。
- ・ 毎日使ったら英語が上達すると思うので日常的に使用したいと思う。

2012 年度研究会報告

■研究会概要

英語教育カリキュラム研究部会では 2013 年 2 月 17 日に『新課程を見据えた授業実践報告と授業で使える ICT ツール』と題する研究会を名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎で開催した。今回の研究会では高等学校の英語教育を主な対象として、実際に高等学校で ICT 機器がどのように使われているのか、また、高等学校の新学習指導要領が 2013 年度から実施されることを念頭に置いて、実際の高等学校の英語教育はどのような方向に向かっているのか、といった内容を議論した。

講演をお願いしたのは、塚本裕之先生（静岡県立富士高等学校）と米田謙三先生（大阪羽衣学園高等学校）であった（所属いずれも研究会開催時）。

■「新課程を見据えた授業実践報告：英語が使える生徒の育成を目指して～新課程の中の文法指導について～」(塚本裕之先生)

塚本先生からは、「新課程を見据えた授業実践報告：英語が使える生徒の育成を目指して～新課程の中の文法指導について～」というタイトルで、高等学校の新学習指導要領が 2013 年度から実施されることを念頭に置いて、勤務校に於ける英語教育をどのように考えるのか、という内容をお話しいただいた。塚本先生が勤務している静岡県立富士高等学校は、お話しの中でも説明があったが、静岡県内で国公立大学の進学実績が 11 年連続第 1 位という進学校である。大学進学のための授業（特に国公立大学の進学実績）を、生徒及び生徒の保護者、さらには地域の人々から期待されている背景があり、その中で新学習指導要領の内容をどのように考えるかという、高等学校における英語教育に携わっている関係者にとっては喫緊のテーマである。

塚本先生の勤務校では 2013 年度の新学習指導要領実施に先駆けて 2012 年度入学生から英語の授業は基本的に英語で行うこととして実施していた。ところがこの方針に対して、まず、PTA の一部の懇談会の中で「入試に対応できるのか」という主旨の質問があり、保護者の間で不安があることを示していた。また、「英語の授業を基本的に英語で行う」ということは、例えば「訳読式授業からの脱却」に必然的に繋がるが、このことは現実的には、教員がこれまで慣れている授業方法からの変更を迫られることになる。また、生徒及びその保護者の願いが大学入試に合格することであるにしても、これまで従来のやり方を繰り返すばかりで、現在の実際の入試ではどのような英語能力が求められているのかも改めて検証する必要があるのではないか、ということ考えた。そしてその結果を「構内ガイドライン」として策定した。この作業の前提は「教師により選び出され、シンプル化された「英語 Skill」を重点的に繰り返し指導すれば、生徒・教師がやった感（達成感・充実感）を持つことができる」ということである。この「校内ガイドライン」の策定によって、教員が持つ新しい授業方法に対する漠然とした不安感をなくす、としている。一方、生徒た

ちは英語をはじめとして高い学力を持っているわけであり、入試のための英語であれ何であれ、高等学校で養成している英語学力が、そのまま実際に使える英語能力でに繋がり、大学入学後もその能力を維持できることがもっとも望ましいわけである。このような授業方法を採用することで、英語学力の高い生徒が実際の英語能力も高くなるということになれば高校での英語授業は効果があると自信を持って生徒や保護者に説明できることになる。

「ガイドライン」では英語の指導を「文構造」（語彙文法的結束性）と「情報構造」（意味的結束性）の2つに大別した。「文構造」では①文の中の区切り（スラッシュ）の判断（接続詞の *that* の前、関係詞の前、述語動詞の前など）、②副詞句の把握、の2点に絞っている。また「情報構造」では、新情報・旧情報の把握、言い換え、そして文章全体がどのような構造になっているのか、などを正確に理解することに重点を置くこととした。またこのような内容を授業で教える際の配慮事項として、英和辞典から英英辞典が使用できるように生徒を指導することや、「予習」中心から「復習」中心の授業にすること、英文法指導にあたってはコミュニケーションのための文法指導を行うこと、などを設定し、教員同士の申し合わせにするとともに生徒・保護者への説明を行っている。英英辞典については *Longman Active Study Dictionary* を挙げて生徒にその使い方の指導も行い、文法指導にあたっては、これまでの定番の文法参考書だけではなく、*English Grammar in Use* などを教師が参照しながら授業の計画を立てることなども塚本先生のお話の中で説明があった。

■塚本先生のお話のポイント：

塚本先生のお話の中で重要なポイントして次のような事柄が考えられるだろう。

- (1) 生徒や保護者が必要としていること（「入試のための英語指導」）についてきちんと肯定し、その上で何ができるかを考えたこと。「入試のための英語指導」を無視するといくら立派なことをやっても生徒は塾に逃げるだけ」という塚本先生のお話が印象に残った。
- (2) 「授業は英語で行うことを基本とする」という学習指導要領の文言について、自分の担当している生徒たちはどのようなアプローチがもっとも効果があるかを考え、生徒の実態（学力、学習への意欲）に合わせた授業方法を考えたこと。
- (3) 「偏差値が高いけど英語が話せない」「偏差値が高くて英語が話せる生徒を育てたい」という塚本先生のキャッチコピーには、生徒が大学入試を通過して、大学に入学しさらには社会で活躍する時に高校で勉強したことがそのまま活かせるようにしていきたいという意気込みが伝わってくる。

■これからの課題

さて塚本先生のお話を聞いて、このような興味深い実践報告を今後どのように発展させていくかについて次のようなことを考えた。

これはいわゆる進学校での取り組みであるが、他の学校でも応用可能であるのか。ある

いはどのような配慮をすれば「一般化」できるのだろうか。

この点について、研究としての「一般化」は実践の現場にいる教員ではなく、研究者の立場にあるものが取り組むべき課題であるとも言える。しかし一方では、高校の先生方は生涯で何度か転勤をして、様々な生徒たちを教えることになるわけで、その意味からは前任校で取り組んだ課題が、次の学校でも利用できることが望まれる所以である。

■いよいよデジタルが高校にもやって来た！学校の中における ICT の活用を考える～電子黒板からデジタル教科書まで～（米田謙三先生）

米田謙三先生（大阪羽衣学園高等学校）の講演は ICT を利用した高等学校の英語教育というテーマで「いよいよデジタルが高校にもやって来た！学校の中における ICT の活用を考える～電子黒板からデジタル教科書まで～」というタイトルで行われた。米田先生は高等学校に勤務されていて、私立の学校で ICT に力を入れているという事情もあり、実際に勤務校で ICT を利用した英語教育を実践している。また高等学校だけでなく、小学校、中学校も含めて学校で ICT 全般の利用や、特に最近ではデジタル教科書の可能性やその実用性などについても全国各地の研究会でお話しをされている。

米田先生のお話は ICT が Information Communication Technology の略語であることから始まり、「平成 23 年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果（速報値）」をもとにして、現在の ICT の学校における普及状況の説明があった。例えばパソコン(PC)1 台当たりの学習者数では全国平均 6.6 人に 1 台であり、校務用パソコンを見ると全国平均は 102.7%になる。学校におけるインターネットの接続状況を見ると、30Mbps 以上の接続性能を持つ学校が全国平均で 69.8%、いわゆる高速インターネットについては 99.5%まで整備されている。ちなみに普通教室の LAN 整備率も 83.6%に上っている。

そのような ICT の普及状況をふまえて、次にいわゆるデジタル教科書について扱っている。「デジタル教科書」と一般に言われているものは実は 2 種類ある。1 つは「指導者用デジタル教科書」と言われるもので、以前の小学校英語活動や、2011 年度から実施されている新学習指導要領下での『英語ノート』『Hi, friends!』のように教室で指導者が教室のスクリーンやディスプレイに提示して教材として使用するものである。もちろんその際に電子黒板があればさらに効果的であるとされ、またデジタル教科書も電子黒板を使用することを想定して教材を製作している。このタイプのデジタル教科書が現在徐々に普及しており、普及率は全国平均で小学校で 29.4%、中学校では 17.3%、高等学校では 3%となっている（なお、小学校の数字には『Hi, friends!』は含まれていない）。

一方、「学習者用デジタル教科書」は、学習者 1 人ずつに配布し、ノートパソコンやタブレットパソコンなどにインストールして、現在の教科書に代わるものとして使用する。各国で開発が進んでおり、日本でも研究開発校が指定され実証実験が行われている。また名古屋学院大学の先駆的な試みに見られるようなパソコンを学生全員に配布するということは、近年のパソコンの実勢価格の下落やいわゆるタブレット型パソコンの急速な普及など

を考えると、経済的にはすべての学習者に這い振るできる環境が整ってきたと言える。実際に、私立の小学校、中学校、高等学校の一部ではタブレット型パソコンの配布も始まっている。そのような実績を踏まえて現在考えられている問題としては、まず第一に、現行では検定教科書の学習者用デジタル教科書は発売されていないので、現在のところ何を教材として児童生徒に持たせるかが明確になっていないという問題点がある。第 2 に、パソコンの管理の問題として、児童生徒が勝手にソフトウェアをインストールして、例えばハードディスクが一杯になってしまうとか、パソコン自体の設定が変更されてしまうとかの問題がある。このような問題をはじめとして、実際にどのように配布したパソコンを運用していくかはこれから、学校での実績を積み上げていく中で考える必要がある。

最後に結論として、「(授業の) 組み立て方次第で、生徒の参加を促せる」と述べ、「機械に依存するのではなく、教師の弱点を補い、(生徒の学習) 活動を活発にするための補助として使う発想が大切」という説明があった。至言であろう。

■米田先生のお話のポイント

現在の ICT の普及状況や実際にそれを活用した授業がどのように展開されているかを分かりやすく説明していただいて、ICT は案外と普及しているのだな、というのが第 1 印象である。逆に考えると、それをどのように使っているのか、またその効果的な利用方法が教員にきちんと伝わっているのが問題なのかもしれない。また将来の展望について、その利用について、「ワンクリックで関連画像を表示できる ICT 機器」という表現を用いて、説明中心の一方通行の授業を丸投げする、という危険性も指摘されていた。ICT の学校への普及もこれから進んでいくと考えられるが、むしろいろいろな ICT が実際に使えるようになった時に、自分たちがどのように授業を組み立てるのか、大いに期待を膨らませて想像してみたい。

■これからの課題

米田先生が最後に強調していらっしゃったように、「機器に依存するのではなく、教師の弱点を補い、活動を活発にするための補助として使う発想が大切」である。もう一点補足すると、最初から機器を怖がってはいけないということもある。教員はどうしても、これまで自分が確立してきた授業の方法から離れたくなくて、それはある意味では当然のことかもしれないが、いちど使ってみること、使ってみて何ができるのかを自分で確かめる態度が必要であろう。新しい技術を自分の味方にしなくてはならないのである。

名古屋学院大学
英語カリキュラム
研究会

富士高校の紹介
富士高校の今
～教師を取り巻く環境～
新課程に向けて
取り組んでいること
授業実践

～新課程を見据えた授業実践報告～

**英語が使える生徒の
育成を目指して**
～新課程の中の文法指導について～

静岡県立富士高等学校
塚本裕之
2012.2.17



静岡県立富士高等学校

90TH ANNIVERSARY




1学年8クラス(320名)

校訓
勤勉実力を養え
克己心身を錬れ
至試事に当たれ

- ◎ 一人一人が文武両道の実行に全力で取り組む。
- ◎ 記憶中心ではない「教えて考えさせる授業」を通して、思考力、創造力、コミュニケーション能力、情報活用能力等の、質の高い学力を身に付けさせる。
- ◎ 計画的な情報分析や面接を通して、生徒一人一人の個性や能力を活かせる進路を共に考える。
- ◎ 世界的に活躍している著名人による講演、芸術鑑賞、尾瀬における高原教室等を通して、豊かな心やたくましい体力を育む。

静岡県立富士高等学校

国公立合格者数
11年連続 県下NO.1

週刊ダイヤモンド
大学合格力
全国高校ランキング85位
(3年連続県NO.1)

静岡県立富士高等学校

**順風満帆！
変える？
必要ないでしょ**

静岡県立富士高等学校

確かにそうかも...

静岡県立富士高等学校

But,

静岡県立富士高等学校

偏差値高いけど
英語
話せない！

静岡県立富士高等学校

偏差値も高くて
話することができる
生徒を育てたい

静岡県立富士高等学校

英語を話すことができる生徒
はおのずと偏差値は高くなる
はず。

文字情報
テスト



音声情報
テスト

静岡県立富士高等学校

変革

- ◎訳読式授業からの脱却 (教科書 CROWN ESI 三省堂)
- ◎英和辞典から英英辞典へ
- ◎「予習」ペースから「復習」へ
- ◎英文法指導の見直し(「コミュニケーショングラム」)
- ◎カリキュラムの見直し(担当教員)
- ◎ALTの活用方法(「O.C.I」)
- ◎2年ライティングの指導内容



保護者への説

教師を取り巻く環境

平成24年度 富士高PTA〇〇支部懇談会 参考資料

各学年部の先生方へ

参加者からの質問事項です。学年別懇談会の中で、回答をお話いただきたくよろしくお願いします。

〇〇支部長

<質問>

英語の授業についての質問です。1年生は今までとは異なり、英語で授業が進められていますが、生徒はしっかりと理解できているのでしょうか。また、入学式の説明の時、「下の学年から指導要領が変わり、浪人した時は下の学年と試験を受けるので、そのためにも、変更した」と話されました。しかし、本来は現役合格を、目指すべきであり、富士高生で浪人する生徒は少数です。それなのに「浪人したときのため…」とは納得いきません。来年も、このままの授業スタイルなのでしょうか。受験は大丈夫なのでしょうか。不安です。

教師を取り巻く環境

平成24年度 富士高PTA〇〇支部懇談会 参考資料

保護者からの
批判

塾にとっては
チャンス!

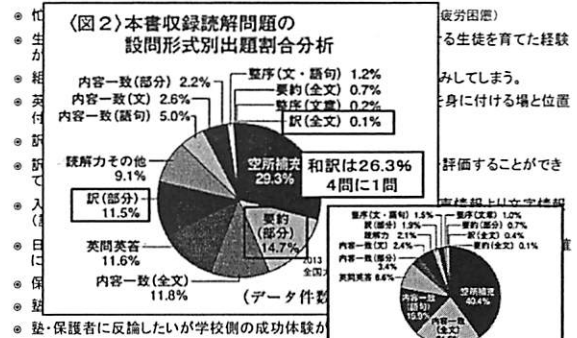
教員からの
無言の
批判!

英語の授業についての質問です。1年生は今までとは異なり、英語で授業が進められていますが、生徒はしっかりと理解できているのでしょうか。また、入学式の説明の時、「下の学年から指導要領が変わり、浪人した時は下の学年と試験を受けるので、そのためにも、変更した」と話されました。しかし、本来は現役合格を、目指すべきであり、富士高生で浪人する生徒は少数です。それなのに「浪人したときのため…」とは納得いきません。来年も、このままの授業スタイルなのでしょうか。受験は大丈夫なのでしょうか。不安です。

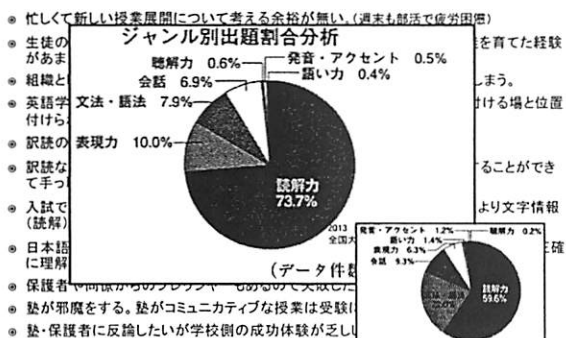
教師を取り巻く環境

- 忙しくて新しい授業展開について考える余裕が無い。(週末も部活で疲労困憊)
- 生徒の偏差値を上げる(大学へ送る)経験はあっても、英語が話せる生徒を育てた経験がありません。(成功体験がない)
- 組織としての成功体験も無く、教員間の意識の統一が困難で尻込みしてしまう。
- 英語学習が学習習慣(予習-授業-復習という「黄金サイクル」)を身に付ける場と位置付けられている。
- 訳読の方が教えているという実感を得ることができる。
- 訳読ならば、授業中に生徒の訳を確認するだけで取組みの態度を評価することができて手取り早い。(最低限、写してあればOKとみなす)
- 入試ではどれだけ文字情報を処理できるかが大切になるため、音声情報より文字情報(読解)の指導が多くなってしまふ。
- 日本語には助詞があるので、訳させてみれば語と語の修飾関係など英文の構造を正確に理解しているかすぐに確認することができる。やっぱり文法は大切！
- 保護者や同僚からのプレッシャーもあるので失敗したらどうしよう。
- 塾が邪魔をする。塾がコミュニケーションな授業は受験には役に立たないと宣伝する。
- 塾・保護者に反論したいが学校側の成功体験が乏しい。

教師を取り巻く環境



教師を取り巻く環境



教師を取り巻く環境

- 忙しくて新しい授業展開について考える余裕が無い。(週末も部活で疲労困憊)
- 生徒の偏差値を上げる(大学へ送る)経験はあっても、英語が話せる生徒を育てた経験がありません。(成功体験がない)
- 組織としての成功体験も無く、教員間の意識の統一が困難で尻込みしてしまう。
- 英語学習が学習習慣(予習-授業-復習という「黄金サイクル」)を身に付ける場と位置付けられている。
- 訳読の方が教えているという実感を得ることができる。
- 訳読ならば、授業中に生徒の訳を確認するだけで取組みの態度を評価することができて手取り早い。(最低限、写してあればOKとみなす)
- 入試ではどれだけ文字情報を処理できるかが大切になるため、音声情報より文字情報(読解)の指導が多くなってしまふ。
- 日本語には助詞があるので、訳させてみれば語と語の修飾関係など英文の構造を正確に理解しているかすぐに確認することができる。やっぱり文法は大切！
- 保護者や同僚からのプレッシャーもあるので失敗したらどうしよう。
- 塾が邪魔をする。塾がコミュニケーションな授業は受験には役に立たないと宣伝する。
- 塾・保護者に反論したいが学校側の成功体験が乏しい。

教師を取り巻く環境

偏差値が高いのに
英語
話せない！

教師を取り巻く環境

変えたいけど
変えられない

教師を取り巻く環境

なぜ変えられ
ないのか？

教師を取り巻く環境

不安だから

教師を取り巻く環境

文法訳読式授業を変えられない主な理由は教師が持つ
不安感

安心して指導することができる環境の整備が必要

ガイドラインの策定(目標の重点化)

安心して指導することができる環境の整備

校内ガイドラインの策定
(指導目標の重点化)

配慮事項

- ◎ 教師の不安感を取り除きたいため「入試に必要とされる英語Skill」をガイドライン策定のために一度洗い出す。
- ◎ 「入試に必要とされる英語力」の中で問われる割合の高い「英語Skill」を取り上げてガイドライン(重点指導項目)とする。
- ◎ 英語を「活用」する時間を増やすために、「英語Skill」はできるだけシンプル化する。
- ◎ 目標を達成する教室内的な手段を音声情報に限る。その中で、どれだけ文字情報に頼らなければいけないかを考える。

ガイドラインの策定(目標の重点化)

校内ガイドラインの策定
(指導目標の重点化)

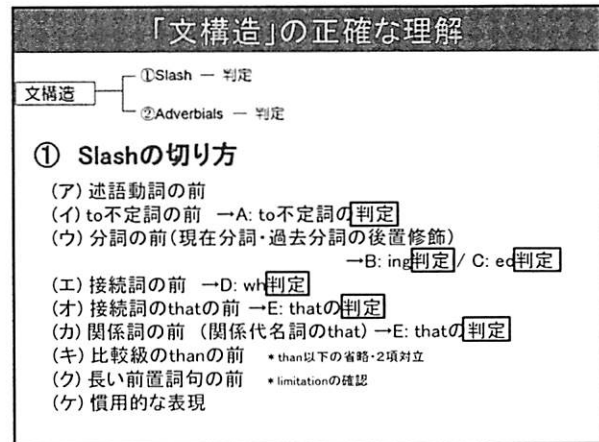
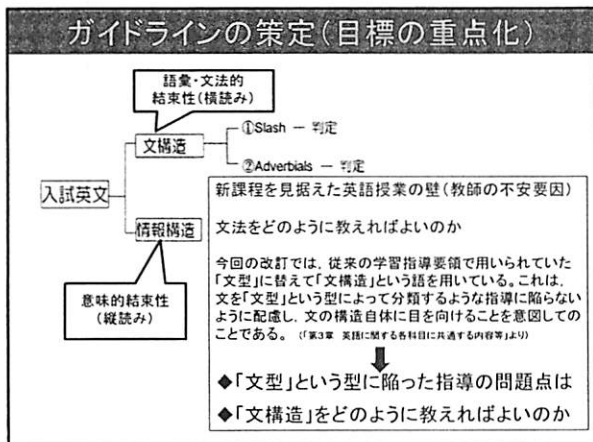
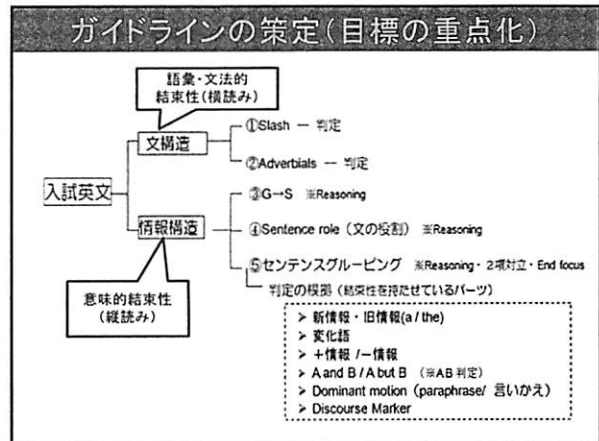
教師により選びだされ、シンプル化された「英語Skill」を重点的に繰り返し指導すれば、生徒・教師がやった感(達成感・充実感)を持つことができる

漠然とした不安感がなくなるはず

入試英文を解く上で必要とされる
スキルを洗い出し「見える化」



「和訳」ではなく「英語そのもの」
を見る「習慣化」



「文構造」の正確な理解

文構造 — ①Slash — 判定
— ②Adverbials — 判定

① Slashの切り方
(ア) 述語動詞の前

**スラッシュを入れることはできても
何のスラッシュか説明できない**

(オ) 接続詞のthatの前 → E: thatの判定
(カ) 関係詞の前 (関係代名詞のthat) → E: thatの判定
(キ) 比較級のthanの前 * than以下の省略・2項対立
(ク) 長い前置詞句の前 * limitationの確認
(ケ) 慣用的な表現

「文構造」の正確な理解

名詞・形容詞・副詞的用法

In high school, I got part-time jobs to save money.

判定

A: to不定詞の判定
B: ing判定
C: ed判定
D: wh判定
E: thatの判定
F: A/B系動詞の判定

「文構造」の正確な理解

名詞・形容詞・副詞的用法

In high school, I got part-time jobs to save money.

(こと or 説明)

判定 富士高英文法 ツール化・パターン化

A: to不定詞の判定 (こと or 説明)
B: ing判定 (こと or 説明)
C: ed判定 (過去形 or 説明)※
D: wh判定 (説明 関係詞 or 関係詞)
E: thatの判定 (こと 接続詞 or 関係詞)
F: A/B系動詞の判定 (V+A か V+ A/B)

重点指導項目

「文構造」の正確な理解

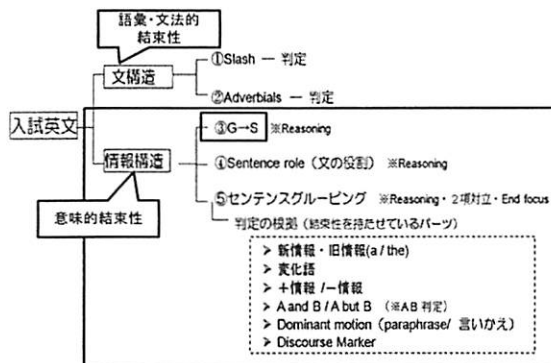
Deciding on each day's plan that very day is like living in a story without any plot.

まさにその日に (副詞)

文構造の理解を邪魔するもの
↓
副詞相当語句
()でくるべきもの
↓
Adverbials
time, place, contrast, cause or reason, purpose, condition

重点指導項目

ガイドラインの策定と目標の重点化



「情報構造」の正確な理解

英語は情報が
G→S
に流れる傾向にある

Many people... (Text from the exam paper)

S1: Of course, having pets in the workplace can lead to (36) (For example, having pets in factories might be dangerous because they could cause accidents. Noisy animals, such as some birds, could make it hard for people in offices to concentrate on their work.)

S2: (36) 1 memories 2 friendship 3 problems 4 waste

「情報構造」の正確な理解

英語は情報が
G→S
に流れる傾向にある

Many people... (Text from the exam paper)

S1: Of course, having pets in the workplace can lead to (36) (For example, having pets in factories might be dangerous because they could cause accidents. Noisy animals, such as some birds, could make it hard for people in offices to concentrate on their work.)

S2: (36) 1 memories 2 friendship 3 problems 4 waste

判定: Specific information (—)

「情報構造」の正確な理解

次の英文を読んで、その内容を40字以上50字以内の日本語で要約せよ。ただし、句読点も字数に数える。(配点14) (2012年度 3年生第2回ベネッセ・難関記述模試 10月)

G S

Our world is full of the most astonishing inventions from MP3 players to stain-eating soaps. Each of these is the product of centuries of scientific and technological effort, resulting in an artifact that is designed to improve our lives in some small but significant way. But the technology that surrounds us is based on a set of assumptions about how it will be used. Shampoo works just fine in your hair, but when it is spilled on the floor it suddenly becomes a slippery mishap waiting to happen. The objects that we use every day are designed to operate only in the right context. Put that object out of context — metal in a microwave, chewing gum in your hair, wine on a rug — and suddenly the science works against you. Now the dirt-removing soap acts like a lubricant on your feet — exactly the worst place for it. The metal in the microwave causes alarming sparks to zap and crackle inside. The chewing gum becomes an appalling adhesive impossible to untangle from your hair. The spilled wine is transformed into a dye that seems more permanent than the original pattern in the rug.

「情報構造」の正確な理解

次の英文を読んで、その内容を40字以上50字以内の日本語で要約せよ。ただし、句読点も字数に数える。(配点14) (2012年度 3年生第2回ベネッセ・難関校模試 10月)

Our world is full of the most astonishing inventions from MP3 players to stain-eating soaps. Each of these is the product of centuries of scientific and technological effort, resulting in an artifact that is designed to improve our lives in some small but significant way. But the technology that surrounds us is based on a set of assumptions about how it will be used. Shampoo works just fine in your hair, but when it is spilled on the floor it suddenly becomes a slippery mishap waiting to happen. The objects that we use every day are designed to operate only in the right context. Put that object out of context — metal in a microwave, chewing gum in your hair, wine on a rug — and suddenly the science works against you. Now the dirt-removing soap acts like a lubricant on your feet — exactly the worst place for it. The metal in the microwave causes alarming sparks to zap and crackle inside. The chewing gum becomes an appalling adhesive impossible to untangle from your hair. The spilled wine is transformed into a dye that seems more permanent than the original pattern in the rug.

【解答例】

- ・数多くの便利な発明品は科学技術の産物であるが、正しい使い方をした場合にはのみ有益である。(43字)
- ・世間の様々な便利・発明品は長年にかゝる科学技術の成果であるが、正しい使い方を間違えると害をもたらす。(49字)
- ・科学技術は多くの有益な発明品をもたらしてきたが、それらは所定の用途でのみ使われるようつくられている。(50字)

ガイドラインの策定と目標の重点化

「文構造」と「情報構造」の関連づけ

This slide shows something/that appears to be a waterway.

G → S
(こと or 説明) V

ガイドラインの策定と目標の重点化

「文構造」と「情報構造」の関連づけ

正解)

- The waitress who served us was impolite and impatient.
- The building which was destroyed in the fire has now been rebuilt.
- The people who were arrested have now been rebuilt.
- The bus which goes to the airport runs every half hour.

922 Make one sentence from two. Use who/that/which.

- A girl was injured in the accident. She is now in hospital.
The girl who was injured in the accident is now in hospital.
- A waitress served us. She was impolite and impatient.
The waitress who was impolite and impatient served us.
- A building was destroyed in the fire. It has now been rebuilt.
The building which has now been rebuilt was destroyed in the fire.
- Some people were arrested. They have now been released.
The people who have now been released were arrested.
- A bus goes to the airport. It runs every half hour.
The bus which runs every half hour goes to the airport.

ガイドラインの策定と目標の重点化

Unit 95 Relative clauses 4: extra information clauses (1)

There are two types of relative clause. In these examples, the relative clauses are underlined.

Compare:

Type 1

- The woman who lives next door is a doctor.
- Crane works for a company that makes furniture.
- We stayed at the hotel (that) you recommended.

In these examples, the relative clauses tell you which person or thing (or what kind of person or thing) the speaker means.

The woman who lives next door tells us which woman.

A company that makes furniture tells us what kind of company.

The hotel (that) you recommended tells us which hotel.

We do not use commas (,) with these clauses:

- We know a lot of people who live in London.
- London

Type 2

- My brother Ben, who lives in Hong Kong, is an architect.
- Anna told me about her new job, which she's enjoying a lot.
- We stayed at the Park Hotel, which is a friend of our grandmother's.

In these examples, the relative clauses do not tell you which person or thing the speaker means. We already know which thing or person is meant. 'My brother Ben', 'Anna's new job' and 'the Park Hotel'.

The relative clauses in these sentences give us extra information about the person or thing.

We use commas (,) with these clauses:

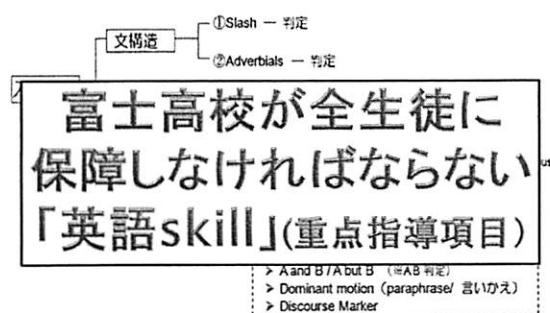
- My brother Ben, who lives in Hong Kong, is an architect.
- Anna

The doctor is Ken. He is good-looking. → The doctor is Ken, who is good-looking.

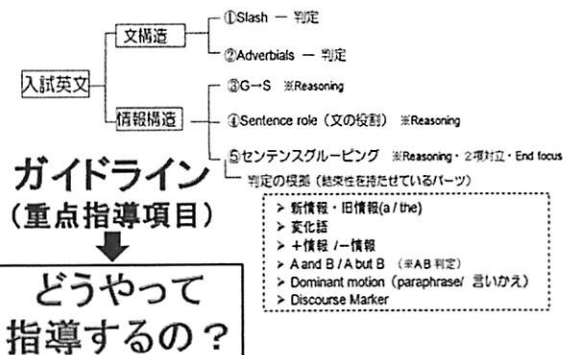
G S

The doctor/who is good-looking/ is Ken.

ガイドラインの策定と目標の重点化



ガイドラインの策定と目標の重点化



HOW TO IMPLEMENT 1

Eliciting Q&A (文構造)

In high school, I got part-time jobs / to save money.

Eliciting Q&A:
Why did he get part-time jobs?
— To save money.

【Eliciting Q&Aの作成】

- ①Slash
こと→what 説明→why / how
- ②Adverbials
time→when, place→where, contrast →what,
cause or reason→ why/what purpose→why / what,
condition →how

HOW TO IMPLEMENT 2

2 (A) 次の(1)～(3)について、以下の例に従って、語群内の語彙とはほぼ同じ意味となるよう、指定した文で始まる一語で空欄を埋めよ。

(例1) The wind was so strong that I was scarcely able to remain standing. [almost not]
解答例: scarcely

(例2) At yesterday's public meeting, many citizens complained about the recent tax increases. [expressed disapproval]
解答例: complained

(1) The rich in the area makes farming very profitable.
[the surface layer of ground in which plants grow]

(2) No one could have such a rapid increase in prices.
[expected that something would happen]

(3) The three sisters their mother's house after she passed away.
[received as property from a person who had died]

Longman Active Study 英辞典
Longman (ロンドン) 版

Active Study Dictionary

soil /soil/ 41 43 noun [uncountable and countable]
[唐語]
the earth in which plants grow SYN earth

anticipate /æntɪˈsɪpeɪt/ 41 43 verb [transitive]
Verb Form
to expect something to happen and to prepare for it

inherit /ɪnˈerɪt/ 41 43 verb
Verb Form
to receive money or property from someone when they die

HOW TO IMPLEMENT②

【Definition】 (Active Study)

- >miss : to feel sad because you cannot be with someone that you like, or cannot do something that you enjoy :
- >learn: to find out information or news by hearing it from someone or reading it
- >farewell: the action of saying goodbye

We want to see Charlie Brown and Linus and Snoopy and all the other Peanuts characters again tomorrow in our newspaper. If they are not there, we will feel sad as we might be sad because of a friend who has gone away.



We will 3(miss) them if we can't read them.

まとめ

英語が使える生徒の育成を目指した「英語で行うことを基本とする」授業を実践するには教師の不安感を取り除くことが大切。

教師の不安感を取り除くために、生徒全員に保障したい「英語 skill」を選定し、ガイドライン(重点指導項目)を決める。

文法指導について

文型を基にした指導から脱却し、「文構造」と「情報構造」の両方を意識化させ、定着を図る指導をすることが大切。

Active Study英英辞典などを活用しながら、英語を英語で学習する習慣を身に付けさせる指導が大切。



新しい課題(テーマ)と指導方法が生み出される

thirojp@hotmail.com

いよいよデジタルが 高校にもやってきた！



学校の中におけるICTの活用を考える
～電子黒板からデジタル教科書まで～



大阪羽衣学園高等学校 教諭
米田 謙三

本日は...

教育におけるICTを中心に

- 1, ICTの役割
- 2, ICT学習の実践例
- 3, ICT活用のデザイン

で ICTって？何の略？

I nformation
C ommunication
T echnology

PC 1台あたりの学習者数

6. 6人 に1台

(鹿児島 4. 4 愛知 8. 3)

校務用PC整備率 102. 7%

(島根128. 1 奈良65. 3)

「平成23年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果(速報値)」

タブレットPC→iPad2→Viewer ?

インターネット接続

30Mbps以上 69.8%
 (京都98% 石川41%)
 高速インターネット99.5%
 普通教室LAN整備率 83.6%
 (岐阜95.9)
 無線普通教室 23.7%

デジタル教科書

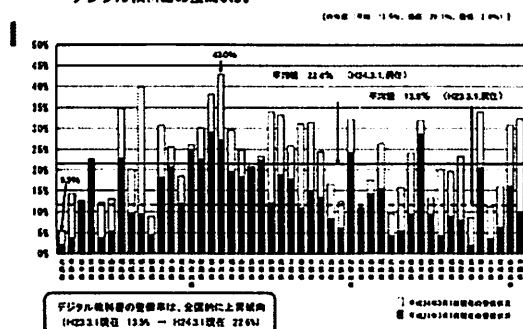
「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」
 (平成24年3月・文部科学省)

小学校	29.4%	6181校
中学校	17.3%	1699校
高等学校	3%	111校
特別支援学校	6.9%	68校 計8061校

(英語ノートはカウントせず)。

平均 22.6% ←13.5%
 石川43% 北海道5.5%

デジタル教科書の整備状況



デジタル教科書って？

「指導者用デジタル教科書」
 販売済 主に電子黒板に投影

「学習者用デジタル教科書」
 子ども一人一人に配布
 文部科学省の言う「デジタル教科書」

KEY: 一斉 個別 協働

「ワンクリックで関連画像を表示できるICT機器」
説明中心の一方通行の授業を丸投げする

結論

「組み立て方と工夫次第で、生徒の参加を促せる」

「機器に依存するのではなく、
教師の弱点を補い、活動を活発にするための
補助として使う発想が大切」

個人的には

7 : 3